

観自在菩薩について

龍 勢

観自在菩薩は日本人に大変親しまれている菩薩の一人で、日本全国に仏像や霊場が数多くあります。

その理由の一つはこの観自在菩薩が、
「機に応じて、その姿を変じて人々を救う。」とされているからでしょう。
では、この観自在菩薩とはどのようなお方なのか見てみることにしましょう。

観自在とはサンスクリット語の「アヴァ（普く）」「ローキタ（見る、見た）」イーシュヴァラ（自在者）」の合成語です。この様に翻訳し漢字を当てたのは、『西遊記』でも有名な玄奘三蔵です。それ以前の翻訳では「観世音」「光世音（こうぜおん）」と翻訳しているのが見えますが、古いサンスクリット語の『法華経』では「アヴァローキタ（観）」「スヴァラ（世音）」と書かれているものもあり、異なるテキストがあったと考えることも否定は出来ません。

観自在菩薩の起源はかなり古く、仏像が作られた当初から手に蓮華を持つ姿の（蓮華手菩薩・れんげしゅごさつ・パドマパーニ）として作像されています。また、初期大乘経典にも登場しています。

「機に応じて、その姿を変じて人々を救う。」と言うのは何を根拠にしているのかと言えば、諸説ありますが、なんと言っても、『妙法蓮華経 観世音菩薩普門品第二十五』でしょう。ここには、

一 仏身、二 辟支仏（びやくしぶつ）身、三 声聞（しょうもん）身、四 梵王身、五 帝釈身、六 自在天身、七 大自在天身、八 天大將軍、九 毘沙門天身、十 小王身、一一 長者身、一二 居士身、一三 宰官（さいかん）身、一四 婆羅門身、一五 比丘身、一六 比丘尼身、一七 優婆塞（うばそく）身、一八 優婆夷（うばい）身、一九 長者婦女身、二十 居士婦女身、二一 宰官婦女身、二二 婆羅門婦女身、二三 童男身、二四 童女身、二五 天身、二六 龍身、二七 夜叉身、二八 乾闥婆（けんだつば）身、二九 阿修羅、三十 迦樓羅（かるら）身、三一 緊那羅（きんなら）身、三二 摩睺羅迦（まごらが）身、三三 執金剛（しゅうこんごう）身

以上三十三の姿に変化して衆生を導くとされています。

観音三十三霊場はこの数字を基にしてつくられたと思われますが、観自在菩薩の名前は一致しません。それは、数ある変化観音を民間信仰によって当てはめたことによるものと思われるからです。

また、この三十三という数字は古代インドでは宗教的に神聖な数で、『リグ・ヴェーダ』では天界・空界・地界に各十一神を配当して、主神を三十三神としました。そしてこれが仏教に受け継がれ、宇宙の中心である須弥山の上に三十三天があり、そこに帝釈天など三十三の神が住むとされました。おそらく三十三に変化するということもここに由来するのではないのでしょうか？

一 楊柳（ようりゅう）、二 龍頭（りゅうず）、三 持經（じきょう）、四 圓光（えんこう）、五 遊戲（ゆげ）、六 白衣（びやくえ）、七 蓮臥（れんが）、八 瀧見（たきみ）、九 施樂（せやく）、十 魚籃（ぎょらん）、一一 徳王（とくおう）、一二 水月（すいげつ）、一三 一葉（いちよう）、一四 青頸（しょうきょう）、一五 威徳（いとく）、一六 延命（えんめい）、一七 衆寶（しゅうほう）一八 岩戸（いわと）、一九 能靜（のうじょう）、二十 阿耨（あくの）、二一 阿摩提（あまだい）、二二 葉衣（ようえ）、二三 瑠璃（るり）、二四 多羅（たら）、二五 蛤蜊（こうり）、二六 六時（ろくじ）、二七 普悲（ふひ）、二八 馬郎婦（ぼろうふ）、二九 合掌（がっしょう）、三十 一如（いちにょ）、三一 不二（ふに）、三二 持蓮（じれん）、三十三 灑水（しゃすい）。

観音如来と変化観音

観音和讃には「昔は正法妙如来」と歌われていますが、実はこの説の出所はハッキリしません。『大悲心陀羅尼經』には「過去に正法明如来であった」とありますので、字は変わっていますがそれが出典であると一応考えています。

『大悲心陀羅尼經』は正しくは『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼經』と言い、千手観音の代表的な經典です。六観音や七観音は変化観音と呼ばれます。変化観音の經典は密教関連の經典になります。さらに『大悲心陀羅尼經』以外にも観音がかつて如来であったことを説く經典に『大仏頂首楞嚴經』があり、その中では「観世音仏」または「観音如来」とされています。

このように、観音が元は如来であったが、衆生救済のために菩薩となった、という話を載せる經典は多いのですが、普通は衆生→菩薩→如来という方向に動くのが、ここでは逆転しています。さらに観音は方便のために衆生に身を変えて出現するという説話も多く、『妙法蓮華經 観世音菩薩普門品第二十五』

目 次

- 1P～ 観自在菩薩について 元サマナ
6P～ カナリヤを読んで感じたことー宮城刑務所便り 平田悟
12P 懲戒相当の議決ー仙台弁護士会 窓口

における三十三身などはその代表的な經典です。これほどの方便力を持つ仏菩薩は他に見あたりません。これらのことから観音がいかに人々に深く信仰されてきたかがわかります。

では三十三観音の一つ一つを見てみましょう。

一 楊柳観音 (ようりゅうかんのん/Dantakastaha)

右手に柳枝を持ち左手は 掌を開いて仰向けて胸にあてる姿を示しています。薬王観音とも言い、楊柳がこの観音菩薩の三昧耶形 (象徴) であるが故に、楊柳観音と言われるのです。

薬王観音と呼ばれる時は、楊柳の枝で悪疫を祓う病氣平癒・除病の功德あるとされています。また水瓶に楊柳の小枝をさす場合もあります。

奈良の大安寺にある木彫立像は有名で国宝に指定されています。

二 龍頭観音 (りゅうずかんのん)

天龍夜叉の身を現わし、雲中の龍の頭または背に坐す姿を示しています。龍頭に乗ることからこの名があります。『法華經 普門品』ではこの観音菩薩の利益を、

「天龍夜叉 (中略) 等の身 を以て得度 (出家) すべき者は、即ち皆之を現じて而も為に説法す」と説いています。龍は聖獣の中でも王とされ、これを観音の功德にたとえたものです。流布する像は雲上の龍に結跏趺坐、あるいは起立しています。

「慈眼視衆生 (じげんししゅじょう)」つまり慈しみの眼差 (まなざ) しで、我々を見ておられる深い慈愛 (じあい) のある観音様なのです

三 持経観音 (じきょうかんのん/S'ravaka)

声聞身の身を現わし、右手にお経を持ち、左手は膝上に置き、岩上に坐す姿を示しています。経巻を持つことからこの名があり、『法華經 普門品』ではこの観音菩薩の利益を「応に声聞身を以て得度 (出家) すべきものは、即ち声聞身を現じて而も為に説法す」と説いている。声聞は如来の説法を聴いて覺りを

得ることから、経巻を如来の説法として表わしている。仏の教えの声を聞いて修行する人、つまり仏の弟子の姿をし 又、仏の教えを聞く人の前にいつも現れる観音様です。

四 圓光観音（えんこうかんのん）

光中に色身を現わし、合掌して岩上に坐す姿を示しています。『法華経 普門品』ではこの観音菩薩の利益を

「或は王難の苦に遇い、刑に臨みて寿命終らんと欲するも、かの観音の力を念ずれば、刀尋ち段段に壊せん（バラバラに壊れる）」と説いています。形像が背中に熾盛（しじょう／火の燃えあがるように勢いの盛んなこと。）の火焰を背負っていることから、圓光観音と称されています。

光とは、仏や菩薩（ぼさつ）の後から円く輝く光明（こうみょう）の事で、あらゆるものを隅々まで照らし、浄土に導き慈悲の心の暖かさが明るく輝いている観音様です。

五 遊戯観音（ゆげかんのん）

五色の雲に乗り、左手を右膝に安じ左手を雲につけ、法界に遊戯する姿を示しています。遊戯とは仏の境地に徹してなにものにもとらわれずに自由自在でなことです。『法華経 普門品』ではこの観音菩薩の利益を

「或は、悪人に逐われて金剛山より墮落（落ちる）するに、かの観音の力を念ずれば、一毛をも損する能わず」と説いています。

飛雲（ひうん）の上に座し、右手で体を支え、左手は立 膝の上に置いた姿で、この観音様を信ずれば 高い所の仕事、旅行等に事故が起きても、怪我（けが）する事なく救ってくれる観音様だと言われています。

六 白衣観音（びやくえかんのん／pandaravasini）

もともと胎藏界現図曼荼羅観音院に住する尊で、名前の由来は、この観音の真言に白處、白衣（パーンダラヴァーシニー）の意味があるところから来ています。白衣（白處）とは自性清浄菩提心を表し、自性清浄菩提心は能く諸仏の大悲を生むが故に、曼荼羅観音部の部母（女性の菩薩／名前の最後がニ一となっているのはサンスクリット語においては女性名詞のため）とされています。

三十三観音では白衣で石上に坐しています。息災除病、安産育児等にご利益があると信仰されています。

またチベット仏教で有名な『パルド・トドウル』（チベット死者の書）では、阿弥陀仏の「妙妃」とされています。

土佐の竹林寺の木造立像は国宝に指定されています。また、高崎の大観音はこの白衣観音です。

七 蓮臥観音（れんがかんのん）

正応身を現わして地中蓮華の上に坐し、合掌する姿を示しています。『法華経 普門品』ではこの観音菩薩の利益を

「小王身をもって得度（出家）すべきものは、即ち小王身を現じて而も為に説法す」と説いています。

釈迦尊の前世菩薩（ぜんせぼさつ）とされ、像型は白衣観音に似て、蓮の葉の上に座し合掌（がっしょう）しています。慈悲の心により、如来への道を開いた慈悲いっぱいの観音様です。

八 瀧見観音（たきみかんのん）

火坑變成池の身を現わして断崖に坐し、滝を見る姿を示しています。『法華経 普門品』ではこの観音菩薩の利益を

「仮に害意を興して大火坑（炎に満ちた大きな落とし穴）に推落せしむるも、彼の観音の力を念ずれば、火坑は変じて池と成らん」と説いています。

岩山に座して静かに滝を見る姿で、世の中の悪意（あくい）・害意（がい）も滝の激しい飛瀑（ひばく）の力で鎮圧（ちんあつ）してくれるのです。

自らの煩惱（ぼんのう）を静め、清らかな落ち着きを与えてくれる観音様だと言われています。

鎌倉の建長寺所蔵の絹本墨書の瀧見観音は国宝に指定されています。

以降次回（156号～）

17 (19.10.14)

宮城刑務所より(カトリックを読んで感じたこと) by 平田 悟

①

NO. 145, 147, 148のカトリックの詩に上祐氏のことが書いてあり、これも読んで感じたことを書きます。まず印象的だったのが、上祐氏が庵本先生に新団体設立の承認をとろうとしていることです。たぶん、ダメもとでやっているのでしょうが、先生が承認するはずありません。それに、黙っていけば何もひいのに、余計なことを書いて自ら墓穴を掘っているように私は見えます。アリバイ作りでこのようなことをしているのではない限り全く理解不能です。

彼は頭がキリシ、タイベート術もピカイチです。しかし、一番大元の土台が空っぽなので彼の話術も空回りです。彼らが行うべきことは「解散し、宗教に近づかないこと」ですが、それが全くわかっていません。仏教で言う戒誓の囚われとは正にこのことなのでしょう。

彼らの主張の主眼は、「法律は守り、被害者への賠償もするから、自分達の信仰の自由を認めて欲しい」ということです。さらに彼は「社会に融和したい」(NO. 147 4頁)とも書いています。しかし、この2つは水と油の関係であり、どちらも満たすとは不可能です。

一般の人達は、「オウムを信じていた」と言うだけで、その個人に不信感を持ちます。これが空気となって社会に充満しています。このような社会環境で、「宗教に、あるいは仏教に帰依している」と表明すれば、それだけで不信の目で見られます。もし、臨済宗や日蓮宗に帰依したというのであれば、麻原氏とは決別したと理解されるでしょうが、そうではないならば、一般の人達は気持ち悪がって拒絶すると思います(No. 148: 上祐氏が麻原氏のことを「表わしにくい程複雑な面がある」と書いていますが、結局は麻原氏を上祐氏が断罪できないのが大問題だということを全くわかっていません。私なら「サマを^路頭^路に迷わせ、信徒に迷惑を掛け、被害者を苦しめ、社会を恐怖に陥れた張本人は麻原彰晃であり、あんな奴に帰依したのは大間違だった」と言います)。これを避け、社会に本当に受け入れられないのなら、宗教から足を洗って、別の既存宗教に帰依するかの2択しかない

と思います。それが嫌なら社会から除け者にされるのを覚悟して自分の信じることをする以外に方法はありません。[★上祐氏は人殺しを直接行っていないから、それから生じる地獄のような苦しみも体験していません。だから麻原に対して若干の恩義を感じているのじゃないか]

次に、上祐氏は「法的な賠償の義務はない」と主張しますが、それを判断するのは裁判所です。もし、ミカリの輪が「オウム後継団体」と認定^{これ}されれば、彼らは賠償の義務を負うことになります。彼はそれを見越して「自分達は無関係だけど賠償したい」と先手を打っているように私には見えます。このように見られるのは彼らも心外ではうから、白黒はつきり付いて方々いいと思います。もし、民事訴訟で「ミカリの輪はオウム後継団体ではない」と判決が出、それでも賠償したいというのであれば、上祐氏達の誠意も社会に認知^るされ^るでしょうから。でも、恐らく裁判を起せば、彼らはオウム後継団体と認定されると思います。

オウムはカルトなので、その元構成員が既存の宗教とは違う宗教を起して、世間では、カ^ルトとしか認識しません。メディアもそれを補強するように仕掛けてあげません。すると、関係者達は、「自分達は真面目にやろうとしているのにイジメられている」と被害者意識で生活することになります。もちろん、人にはいろいろな生き方があり、そのような生き方をしたいというのであれば、私ごとやかく言えるものではありません。

しかし、そのような被害者意識を持って生きることは何とも不幸なことでは。人から邪険にされて、感謝や思いやりの気持ちが出くことはありません。むしろ、人や世間を恨み、憎^{以前}しを持ちながら生きていくことになるでしょう。これでは平成7年^{以前}のオウムと全く変わりません。このようなメンタリティーが私達のような極悪人を産んだのです。

このような人が急に病気や事故で亡くなれば、間違、なく苦みの多い環境に身を置きます。人はそれを修習した環境に流れるというのがオウムの教えですから。

人の役に立ち、人から感謝され、人のことを思いやれるような生き方であれば、生きていることが喜びであり、楽しい人生です。この人は死後も必ずや喜^びぶの狭い世界に身も置^まります。しかし、口では感謝とか、慈しみだとか言っている、人から感謝されず、相手を見下し、自分の狭い世界に閉じ籠^こまっているような人は、生きていることが辛く、その潜在意識に蓄積したマイナスの感情によって、死後も辛い、全く損な人生を歩むことになると思います。

以前(数ヶ月前)、あるサマサから手紙が届きました。それを読んで「人生を楽しんでいます」という感じはあまり感じられ^せませんでした。いろいろな言葉が書かれていましたが、空虚な言葉の連続で、自分が苦しんでいるというところだけが私には実感が籠^こまっているように感じました。「彼は今を生きているのではなく未来を生きている」、そんな風に感じました。心にもゆとりがなく(それはどうでしょう。地域住民からは出て行けと邪険にされ、何かあったら微罪でも逮捕されるのですから)、大変気の毒だと思いました。想像するのに、「あれをやってはいけません」、「これをやりなさい等」とがんじがらめに拘束され、全く創造性のない、生活では何の楽しみもないでしょう。それに、修行が楽しいから行くのではなく、輪廻から逃れたいという恐怖心だけで仕方なしにやっているから興味がなくなるのだと思います。

輪廻を作り出すのは心の働きです。心が輪廻から逃げたいと思ったところで決まって逃れるとはないでしょう。むしろ、「輪廻?上等じゃねーか! おもい、より楽しんやろから、いつでもかかってこい!」という気概でいた方がいいと思います。どんなに苦しい環境であってもそこに身を置^きき、何かの価値を見出す人にとって地獄は地獄ではなくなってしまう。例えば紛争地帯で活動する医師達は周りは地獄の狭い環境です。しかし、彼らを必要としている人達がいるからどんなに苦しい環境であっても踏み止^どまって活動します。結局は自分のことに関心を持ち、自分以外に関心を持たず、その環境が地

獄に入るか否かが決まってしまうと思っす。

オウムの人達は、修行と称して呪文を唱えるだけです。お教習はし^すますが、それが実生活にはほとんど結び付きません。彼らは何の為に修行しているのでしょうか。恐らく、自分の為です。自分だけが輪廻から解放されることを望んでいます。しかし、このおウムの心では輪廻から解放されることはないでしょう。大切なのは自分を忘れること。そして、人の役に立つことです。生まれ変わる度に、その環境の中で何かの役に立つ人はいれば「地獄であらうが天国であらうが全く同じものとして、その人には認識されるでしょう。そういうことが修行のなかり方と思っす。誰か、あるいは何かの役に立たないものは修行ではなく、単なる時間の無駄無~~駄~~遣い(浪費)です。そのことをよく認識して欲しいと思っす。

ここで上祐氏の言う宗教事業についてふれます。結論から言えば宗教はビジネスではありません。彼は賠償を最大化するには宗教事業が唯一の道(カサヤ10, 145, 12頁)と書いていますが、これはオウムと全く変わりません。

オウムではあらゆる宗教サービスに値段が付けられていた。何かをしてもらったら、いくら以上のお布施になっていて、お布施が足りない人にはそのサービスを提供できないシステムでした。確かに、宗教家も実生活で生きてゆかなければなりませんからお金は必要です。しかし、あらゆる宗教行事がサービスとなって対価が付けられたがために、~~本来~~本当のお布施やお布施の精神が有名無実化してしまいました。例えば仏典には(オウムの教えでもうでいい)、貧乏人の人が全財産の1万円をお布施(1万円は例)した場合と、大富豪が1億円(1兆円の資産のうちの1億円)お布施した場合では前者の方がずばりいいと書いてあります。つまり、お布施というのは対価として成立すべきでは^{ありません}。対価として行われるサービスは宗教ではありません。

全ての人の幸せを祈り、その次に教えるのが宗教家の努めです。お金持ちであらうが貧乏人であらうが宗教的行事を使って幸せにする。これが本当の宗教です。麻原氏は全ての縁のある人を幸せにすると公約していたのに、貧乏人であるがゆえに麻原氏の偽行メニューを受けられなかった人が何人もいます。これが宗教ビジネスが救済とは結びつかない現実でした。

ひかりの輪が被害者に十分な賠償をするには、①メンバーから多くのお布施を募る。②メンバーの数を増やす。この2つを同時に行わなければなりません。しかし勢力の拡大は公安当局から抑止されるし、社会との無用な衝突も産むので簡単ではありません。そして、何よりも被害者が勢力拡大のネタに自分達が利用されることに拒否すると思えます。すると、メンバー1人ひとりに大きな負担が掛かることとなります。こうなると賠償金を与えるようになるのはアーシフと同じです。これでは被害者に賠償金を支払うのは組織存続の言い訳だとおもわれても仕方ないでしょう。

上祐氏は大坂騒動の時、「他人より自分が苦しい。これがボーダー・サトウダじゃないのかよ」等と立ち回りましたが、それを行動で示してもらいたい^{もの}です。

911テロの犠牲者には政府から2億円近い支援金が支給されたと聞きます。一方オウム^の被害者は政府からだけでなく、オウム後継団体と破産オウムの財産から支援金が支払われています。この金額の詳細はわかりませんが、911テロの何分の1かあるいは1割にも満たないかもしれません。このようにしたのは、国家が被害者^{支援}に介入し難しい環境だったからです。オウム後継団体という加害団体が存在し、それが賠償金を支えている(ただし年々減少)状況では国家は介入しません。また、団体が存在する限り、国民が税金投入を許さないという空気も充満しています。結局、オウム

新後継団体の存続が、被害者が国家から手厚く支援される権利を制限していたのです。オウムの人達は自分の権利を声高に叫びますが、このような被害者の権利侵害についてはどのように説明するのかわかっていると思います。

オウムの人達が本当にボーディサットヴァの道を歩みたいならば、自分の生活のこと忘れ、オウム後継団体を解体すべきです。そして「自分達は団体を解散したので被害者の救済は国家にお願ひします。これにて被害者のことを省みるのではなく私達は迷走してました。これによって被害者のために多大なご迷惑と苦しみを与えたことを心からお詫びいたします、等」ときちんと声明を發すべきです。これによって彼らは生活基盤がなくなるかもしれないが、国家が被害者救済に介入する(せざるを得ない)状況になり、被害者の救済が道あると思います。さらに各方面からサマシ達が生活する為に必要な支援プログラムも始まると思います。自分達が誠意を見せれば、周りも必ずや助けをくれると思います(オウム家族会は解散の混乱を最低限にする為にご協力いただける^{そう}でござります【カトリヤ NO.138.1頁〜3頁】)。

サマシや信徒の中には私の知り合いや友人が多数います。一緒に苦楽を共にした仲間達です。だから、今でも彼らが幸せになって欲しいとばかり思っています。今回、彼らにとっては受け入れ難いことを書きましたが、これは彼らに何らかの不满があるからでは決してありません。それよりも、彼らがこれから進むであろう道、将来を想像すると、気の毒で仕方ない為にあえて厳しいことを書きました。しかしこの厳しい道には明るい将来があると自負しています。一方、今の道は多額の負債を抱え、不自由な発想の中での生活である為、苦しみ多い人生となるように私には見えます。よくよく考えていただく資料として、書きましたので参考にしていただければ幸いです。(3)

「懲戒相当の議決-仙台弁護士会」

松下明夫弁護士について、いわゆる麻原高裁判決での控訴趣意書不提出事件について、2006年9月25日、私が最初に懲戒請求を出していました。後に・一市民？さらに東京高等裁判所の一国民？山名学氏が申し立てました。このたび、綱紀委員会が、懲戒相当と議決したとのことで、40ページにわたる議決書を送ってきました。今後懲戒委員会となります。松井弁護士の処分を求めた第二東京弁護士会の方はどうなるかしら。なお、被請求者代理人として仙台弁護士会の弁護士52人が就いていました。。

主文は、下記の通りです。

「本会会員松下明夫（登録番号22933）につき、懲戒委員会に事案の審査を求めることを相当とする。」

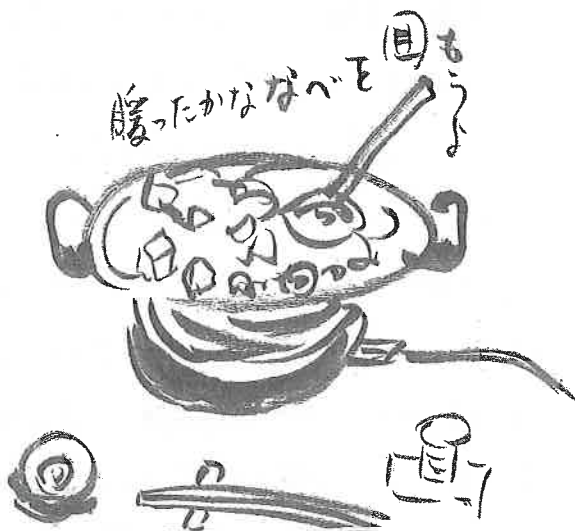
議決書の結論部分は下記の通りです。

「本件においては、控訴趣意書の提出期限の遵守は、弁護人としての基本的な職務であり、期限までに控訴趣意書を提出しないこと自体が、弁護人の職責に反する行為であって、特段の事情がない限り、弁護士法第56条1項に定める非行に該当するものと考えられるところ、被請求者は、特段の事情がなく、控訴趣意書を提出せず、控訴を棄却されるといった結果を生じさせた。

被請求者の行為は、弁護士法第58条第4項の「事案の軽重その他情状を考慮して懲戒すべきでないことが明らかである」とも認められず、同条第3項に基づき懲戒委員会に事案の審査を求めることを相当と判断されることから、主文の通り、議決する。

平成19年10月17日

仙台弁護士会綱紀委員会委員長齊藤幸治



かなりや

西條八十

唄を忘れた金糸雀は、
後の山に棄てましよか
いえ、いえ、それはなりませぬ
唄を忘れた金糸雀は、
背戸の小藪に埋けましよか
いえ、いえ、それはなりませぬ
唄を忘れた金糸雀は、
柳の鞭でぶちましよか
いえ、いえ、それはかわいそう
唄を忘れた金糸雀は
象牙の船に、銀の櫂
月夜の海に浮べれば
忘れた唄をおもいだす

『赤い鳥』（大正七年一月号）
岩波文庫『日本童謡集』より

◎ カナリヤは歌を思い
出す手助けをする。

◎ カナリヤは自分で自
分の歌（考え）を歌う。

◎ カナリヤは歌を歌え
なくなつた鳥を捨てる
のではなく、温かく見
守る。

（地球の揺りかごで）